

研究指導 八木橋 彰 講師

大学生の図書館利用活動を促進させるための要因と改善策 電子書籍を中心に

滝田 彩泉

1. はじめに

本研究は読書が科学的に有効であることが証明されているなかで世間には読書離れがささやかれている。文化庁の全国16歳以上の男女3,000人を対象にした「国語に関する世論調査」では1ヵ月に本を読む量は、読まないが50%近くで最多、次点で1, 2冊が約35%である。

2018年の日経新聞の記事によると大学生の1日の読書時間は「ゼロ」と回答した人が53%であった。半数を超えたのは、調査に読書項目が入った2004年以降初めてである。特にアルバイトをしている学生に読書時間ゼロが多くみられた。1ヶ月の書籍費は1970年以降最低であり、宅生が1,340円、下宿生が1,510円であった。

全国出版協会が発表した出版市場調査によると、2017年の紙の出版物（書籍・雑誌）の推定販売金額は前年比6.9%減少の1兆3,701億円で、13年連続で前年を下回った。紙の出版物の推定販売金額は、書籍が3.0%減少の7,152億円、雑誌が10.8%減少の6,548億円。好調だったジャンルは文芸書、教養新書、参考書で、「九十歳。何がめでたい」、「うんこ漢字ドリル」シリーズなどがベストセラーとなった。一方、電子出版物の推定販売金額は前年比16.0%増加の2,215億円と大きく成長した。内訳は、電子コミックが17.2%増加の1,711億円、電子書籍が12.4%増加の290億円である。

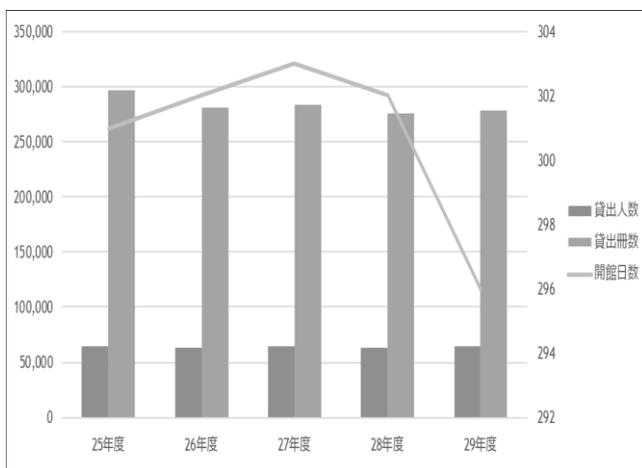
湖西市立図書館の利用状況は5年間の開館日数は7日程度の差である。貸出冊数は29年度が277,966冊であり、25年度に比べて18,910冊減少している。貸出人数は29年度が64,088人であり、25年度に比べて963人減少している。

大日本印刷(DNP)は今後2年で現状の約4割増の100自治体、紀伊国屋書店も2019年春までに大学向けなどで同4割増の100カ所への電子図書館の導入を目指す。しかし近年では電子図書館も増加しているが、2007年11月には1館しかなかった電子図書館が2019年10月には86館まで増えている。目標を達成することはできなかったが、10年前ではあまり身近でなかった電子書籍がここ10年で私たちの生活になじんでいることがわかる。

さらに、図書館の電子書籍化が進むにつれ、利用者にとって便利になることが多くある。育児で絵本を借りるとなると、汚してしまったり、破いてしまったりなど本の寿命が短くなるが、電子化が進むと自宅のタブレット端末で読むことができるため、汚れたり破れたりする心配がなく、ぐずる子供を外に連れてく必要がなくなる。料理も同じくキッチンに持ち込んで読みながら調理をするため、タブレット端末であれば汚すことなく利用することができる。

そこで本研究では実際に若者の読書、活字離れはどれほどのスピードで加速しているのかという現状と、大学生の図書館の利用を促進させるための要因とその解決策を考察する。

図1 湖西市立図書館の利用状況



出典:湖西市立図書館より著者作成

2. 先行研究

渡部ら(2019)は、電子書籍は読まれていること、紙書籍のみの利用者は紙書籍への満足度が高く20代~40代によく読まれていること、電子書籍利用者は紙書籍のみの利用者よりも書籍への関心が高く、電子書籍の長所、短所をある程度認識しており、情報収集頻度が高いことを示した。

浦田(2017)は、大学図書館では読書推進のために読書手帳を導入した。今後の読書推進活動において特に重要ではないかと思われるのは、読書になじみがない人々の置かれている状況に目を向けることである。読書手帳とは読んだ本の情報を記録する手帳である。基本的には著者名、書名、出版社などの文献情報を記入する。読書手帳には感想、意見、要約などを書く場合もあり、本を読んで考える機会と

なる。

伊藤ら(2015)は、アメリカは利用者が図書館のOPAC上で、あるいは図書館のWebサイトから誘導されたベンダーのプラットフォームで貸出を行う。閲覧するためには、各ベンダーが開発したアプリを自分のデバイスにインストールしておく必要があるが、ダウンロードした書籍コンテンツは、貸出期間中はオフラインでも閲覧できる。また紙書籍に倣い、貸出は1回に1人と限定されるため、貸出中のコンテンツは借りている人以外は閲覧できないが、貸出期間を過ぎればコンテンツは個人のデバイスから自動的に消失し、予約待ちの別の利用者が貸出手続きできる仕組みになっている。

3. 本研究の新規性と仮説

先行研究では読書活動の現状に触れ、結果として読書手帳などを利用することで読書量が増えると考えられているが、読書が好きで頻繁に図書館を訪れるような人にはさらに読書活動を推進させることができるかもしれないが、現状で時間がない、と回答している人に対して普段の読書よりも時間がかかってしまう読書手帳の導入などを結果とするのは研究が不十分といえる。そのため、読書手帳を行いたいと考えている人は行わないと回答する人より少ないと考える。

そして、図書館に年に1, 2回、半年に1, 2回に訪れる人が多いと感じるので紙の書籍よりも電子書籍の方が便利であると回答する人が多いと考える。電子書籍が苦手な人は、扱いにくさや所有欲が満たされないところに苦手意識を感じることや、嫌悪感を覚えてしまうと考える。

4. 調査

4.1 調査方法

読書活動の現状を知り、電子書籍の適切さについて調査を進めるにあたり、アンケート調査を行った。
 調査日時: 2019年12月4日から2020年1月5日まで
 調査目的: 電子書籍についての考えを把握するため
 調査対象: 主に会津大学短期大学の学生、他大学の学生

サンプル数: 102件

4.2 調査内容

質問内容は、以下のようになる。

- Q1. 現在大学生ですか(短大生あるいは専門学生を含む)
- Q2. 電気書籍を利用したことはありますか
- Q3. 電子書籍と紙書籍はどちらの方が多く読みますか(紙:電子=○:△)
- Q4. 電子書籍と紙の書籍はどちらの方が自分にとって便利ですか

Q5. 上の質問に対してその理由はなぜですか(自由回答)

Q6. 図書館にくる目的は何ですか(複数回答)

Q7. 図書館で本を借りる目的で訪れる頻度はどれくらいですか

Q8. 年に1, 2回, 半年に1, 2回と答えた方はどうしてですか(自由回答)

Q9. 読書手帳(読んだ本の情報を記録する)を行ってみようと思いますか

Q10. 図書館に電子書籍利用のサービスが存在することを知っていますか

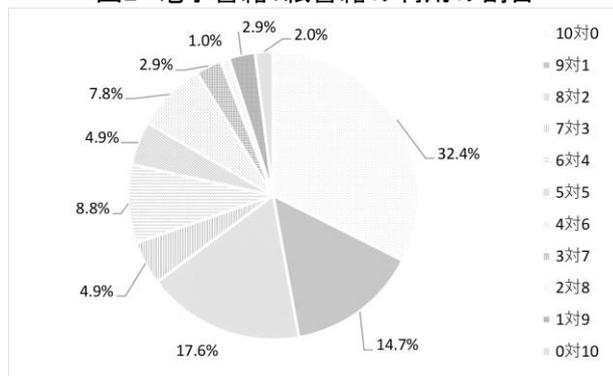
Q11. 電子書籍を利用してみようと思いますか

Q12. (上記の質問に対して利用したくない, あまり利用したくないと答えた方は) どうしてですか(自由回答)以上である。

4.3 調査結果

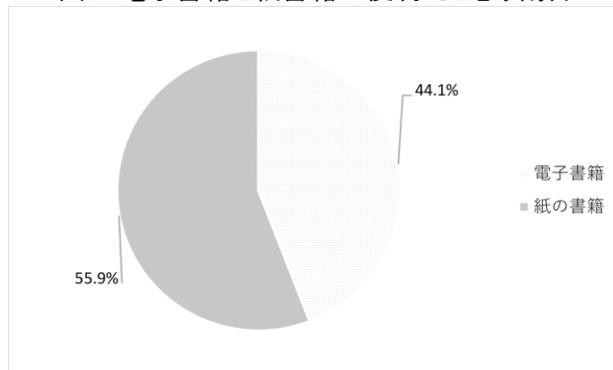
本研究の調査結果をまとめると以下のようになる。

図2 電子書籍:紙書籍の利用の割合



Q3の調査結果から10対0が一番多く32.4%であり、次点で8対2は17.6%、9対1が14.7%であった。上位4位までは紙の書籍の方をよく使う方が多く、逆に1番低いのは2対8で1.0%であった。そして、紙の書籍の方を好む人は78.9%であり、8割近い数字を出した。

図3 電子書籍と紙書籍の便利だと思う割合



Q4の調査結果から紙の書籍を便利だと感じる人が約56%で、電子書籍を便利と感じる人は44%であった。この2つは大きな差はなく、個人に合うか合わない

いかの差であると考える。

電子書籍を便利と考える人は「持ち運ぶのが楽だから」「どこでも利用できるから」「スマホがあればどこでも読めるから」「電子書籍の方がかさばらず、手軽に利用できるから」「夜読むときに別の光源が要らないから」などが多くみられた。紙の書籍は「電子は読みにくく、目が疲れるから」「紙の方が所有感が強い」「端末が重かったり、ネット環境が必要だったりするから」「紙の質感や匂いが好きだから。紙の本だと相手から見ても読書をしていると分かるが、電子だと遊んでいるとマイナスのイメージを持たれるから。振り返って読みやすい」という意見が見られた。

しかし、電子書籍に対するイメージが実際異なっている意見も存在した。「付箋を貼ったり、線を引けたりするから」という意見があったが、Amazonが提供している電子書籍販売のKindleでは自分の買った本にハイライト(マーカーを引くこと)、メモ(書き込み)を残すことができる。手元に付箋やマーカーがなくともタブレット端末1つで行うことができる。さらに、「自分がどれだけ読んだのか分かるから」という意見があったが、電子書籍にも葉機能が搭載されていることが多く、何冊も 동시에 読んで葉を挟むことができる。

図4 図書館に来る目的

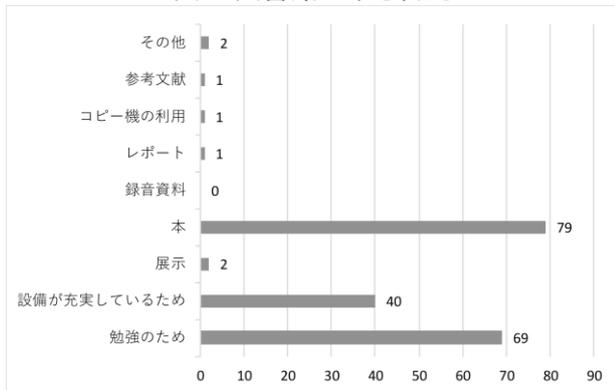
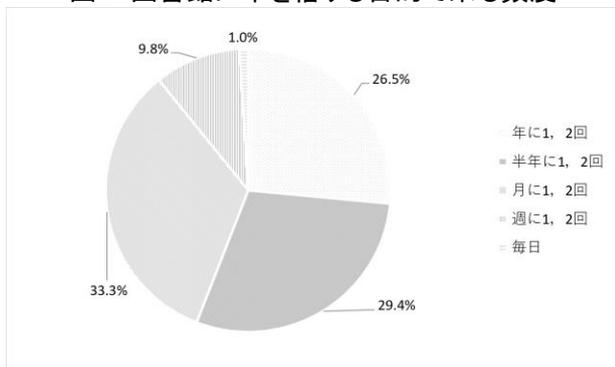


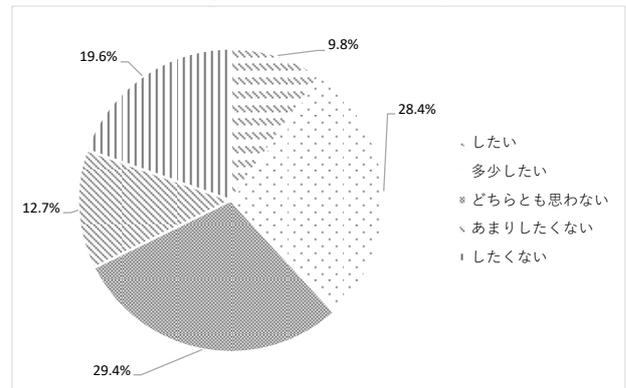
図5 図書館に本を借りる目的で来る頻度



本を借りる目的が1番多く79回答、次点で勉強のためが69回答である。Q7の調査結果から1番多いのは、月に1, 2回が33.3%で、次点で半年1, 2回が29.4%である。年に1, 2回、半年に1, 2回と回答したのは合

わせて55.9%と半数以上を上回るという結果になった。

図6 読書手帳に対する意識



Q9の調査結果から読書手帳をしたい、多少したいという意見が57.8%で半数を超えている。

図7 図書館に電子図書のサービス

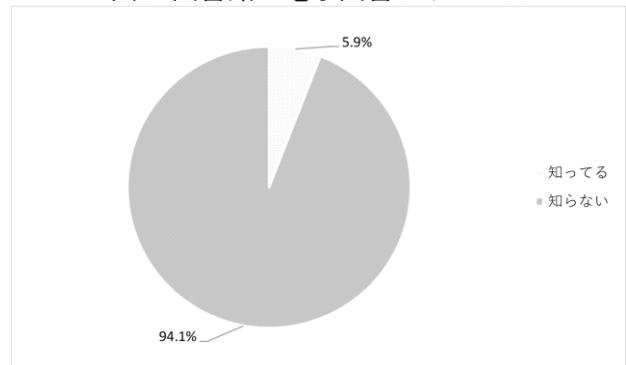
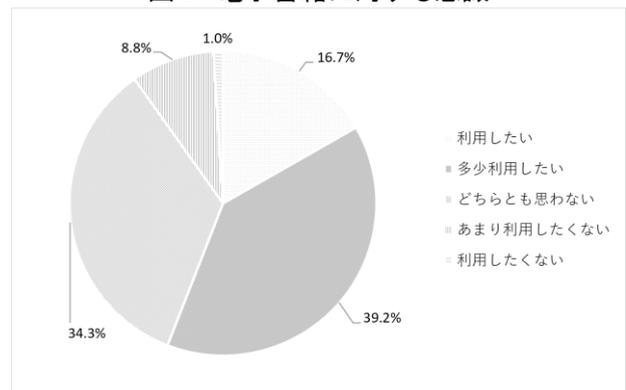


図8 電子書籍に対する意識



Q10の調査結果から知らないが9割を超えている。しかし電子図書館を利用したい、多少利用したいが73.5%である。逆にあまり利用したくない、利用したくないと答えた方は「興味がない」「純粋に紙の本で読むのが好きだから」「電子書籍は読みにくいから」という意見が見られた。

5. まとめと考察

調査結果から本に対して日本は電子書籍に対する意識が低く、イノベーション普及段階におけるイノ

ベーター(革新者),アーリーアダプター(初期採用者),アーリーマジョリティ(前期追随者),レイトマジョリティ(後期追随者),ラグード(遅滞者)の5段階に分けると,ほぼイノベーターしか電子書籍を利用していないと考えられる。電子書籍のメリットをわかっている人も多いが,紙の書籍と電子書籍を自分の好みの割合で使っていく,紙の書籍では賄えないところを電子書籍で補う,という使い方をする人が多く,完全電子書籍のタイプの人はずっと低かった。

読書手帳を行いたいと考えている人は,行いたくないと回答した人より多く,意識として高いことが分かった。さらに,紙の書籍の方が慣れや,所有感が満たされ電子書籍より便利であると感じる人が多いことが分かった。

Q10から電子図書館の認知度はとても低い,多少利用したい,利用したいと答える方が多かったため,認知度の問題であるといえる。主に電子図書館は全員を対象にしているところは少なく,その地区に在住している人,通勤,通学している人などに限られることが多い,さらに全国的に100館も存在しないため認知度が低いのもわかりうるが,電子書籍の存在を知っている人が多い中,電子図書館の認知度が低いのは問題である。

まとめとして,大学生の図書館利用促進のために電子化で短期的に効果を出すことは難しいと考えられるが,長期的に見て自分に合った図書館の利用に合うものが見つかれば改善策になるのではないだろうか。大学生のために公共の電子図書館の使用範囲を増やすことや電子図書自体の数を増やすことが大切であると考え。

6. 謝辞

ご多忙の中,アンケートへご協力して下さった会津大学短期大学部の学生,他大学の学生の皆様方に厚く御礼申し上げます。

参考文献

- [1] 「「1冊も本を読まない」...47,5% 文化庁調査で「読書離れくつきり」産経ニュース
<https://www.sankei.com/premium/news/141011/prm1410110018-n1.html>
- [2] 「大学生「読書時間ゼロ」半数超 実態調査で初」日経新聞
<https://www.nikkei.com/article/DGXMZO27402030W8A220C1CR8000/>
- [3] 「「紙の本」の売り上げ、13年連続で低下 電子書籍は好調も」『ITmedia ビジネスオンライン』
<https://www.itmedia.co.jp/business/articles/1801/26/news092.html>
- [4] 湖西市立図書館 利用状況
<https://www.lib.kosai.shizuoka.jp/information/riyou/>
- [5] 電子図書館 一覧
https://aebs.or.jp/Electronic_library_introduction_record.html
- [6] 渡部和雄,梅原英一,岩崎邦彦(2019)「紙出版

- 物利用者と紙・電子出版物併用者の意識や行動定量分析』『日本印刷学会誌 第56巻第3号』pp146-152
- [7] 浦田葉子(2017)「大学図書館での読書推進—その背景と今後の活動への視点—」『現代マネジメント学部紀要 第6巻第1号』pp53-56
- [8] 伊藤倫子(2015)「電子書籍貸出サービスの現状と課題—米国公共図書館の経験から—」『情報管理 2015 vol. 58 no.1』pp28-39